



8月29日 生涯学習センター会議室にて

九州陶磁文化館でこの秋に開催される開館45周年記念特別企画展「初期伊万里ビッグバン—日本磁器始まりの全貌」を控え、大橋先生の講座「日本磁器生産の始まりと海外輸出」を8月29日、生涯学習センター会議室にて開催した。



この日の講座は、九州国立博物館へ寄贈された「小郡C.Cコレクション」の作品を紹介しながら有田との接点を探るもので、中でも1660年代にインド向けに作られた有田の磁器と推察される内容の話題もあり、興味深い講座になった。

ちなみに小郡C.Cコレクションは、ヨーロッパ向けの製品を中心に、国内向けの古伊万里や、明治から大正期の有田焼、薩摩焼など、貴重な作品の数々で構成されている。

今回の展覧会は現代に生きる私たちをも魅了する初期伊万里の優品と草創期の資料を通じて、これまでの研究成果をもとにその起源と発展の真相に迫る企画展である。

企画展の開催直後には、大橋康二先生の「肥前磁器始まりの全貌」と題する記念講演が行われ、我々史談会メンバーも拝聴する機会に恵まれ、楽しい時間を過ごすことができた。

8月に開催された講座と内容が重なり良い学習機会になった。

## 企画展を前に講座を開催!



# 有田史談会

事務局  
佐賀県西松浦郡有田町上幸平1-8-5  
TEL 090-4740-4752  
HP arita-sidankai.sub.jp/  
MAIL arita-sidankai@hotmail.com

# 初期伊万里ビッグバン

九州陶磁文化館開館45周年記念企画展

今から約400年前、肥前地方では突如として白く硬質な磁器が開発され、産業として急速に発展した。その最初期には多久や伊万里で磁器の開発が試みられ、有田に移つて爆発的に生産が発達したことが明らかになってきた。

染付騎牛笛童子文皿  
1610～1630年代染付辰砂鳥形香合  
1630～1640年代

特別寄稿  
有田の災害史

尾崎 葉子

国内外で災害が相次いでいる中、佐賀では幸いなことに大きな被害は令和3年以降免れています。しかし、「天災は忘れたころにやつてくる」という先人の戒めもあります。記憶を風化させずに次世代に伝えていくことも、今を生きる私どもに課せられたことかもしれません。



文政の大火とも呼ばれ、「シーポルト台風」の異名をもつ

(1838)の「文政の大火あるいは子年の大風」と呼ばれるものが最大だつたようです。今から約200年前です。西日本を襲った台風がもたらしに勤務していたドイツ人医師のシーボルトがオランダ船のコルネリウス・ハウトマン号で国禁の品々を長崎港から持ち出そうとして、台風の風にあおられ難破したことで「シーポルト台風」という異名もあります。

長崎方面から佐賀領に向かってきたこの台風はここ300年の中では総合力最強であったといわれています。最近は50年に一度とか100年に一度、あるいはこれまでに経験したことのない雨などという表現をよく耳にしますが、さすがに300年に一度という表現は見当たらないようです。

小西達男元佐賀地方気象台長(故人)の研究によれば文政11年の台風は、九州を襲った時の中心気圧は935ヘスト・パスカル、最大風速は55メートルに達したと推測されています。台風は現在の長崎県西岸に上陸し、佐賀、福岡、山口の各県を横断したものと思われます。

『浮世の有様』(有田町史 政治社会編I)という資料によれば、ここ有田に襲来したのは「四つ時頃(午後十時)」で、「辰巳(南東)の方より大悪風吹き出し、家毎々々に戸を吹き散らし、家も崩るる如くにて、さも恐ろしき次第なり。子の刻(午前零時)頃、岩谷川内という所より出火ありに降り、火は風に任せて飛びまわり、天より火の降りし如くなり」という火災の様子を伝えています。

さらに「地震は天地を覆さんばかりなり。川は大洪水となり退き行く方もなかりけり」と、火事と洪水と大風が一度に襲った最悪の状態を伝えています。火災の被害はよく知られたところですが、実は同時に水害も襲い、狭い内山の通りは大洪水となり、人々は迫りくる火と水から逃れるのに必死だったことは想像に難くありません。

文正在してます。その結果、前面にあつた4mの前庭で昭和初期の道路拡張の際にも建物には影響はなく、3m上げていた床は昭和に入って地下倉庫に改造され、23年の大水害でも若干の被害ですんだということです。



上幸平の松本家

「松本庄之助伝」(松本源次著)によれば、上幸平の松本家は明治22年(1889)に着工し、2期、3期と加工事をして足かけ16年をかけて完成しています。建設にあたって、両親や古老から「文政の大火」の惨状を聞かされていた庄之助さんの母親ともさんは、新築に当たって火事に対しても建物の周辺に相当の空き地を必ず構える事、大水に対しても床を少なくとも一間(約2m)以上、道路面より高くすることを息子に注

ます。

もう一つ、『文政時津風騒動記』(有田町歴史民俗資料館蔵)という資料には当時の大庄屋某が一旦は家族と共に逃げたものの、余りの周章狼狽で公用向きの書記或いは年貢方の差し引きなどを記した帳面などを持ち出すことを忘れたことを思い出し立帰り、哀れな最後を遂げたことなどが記されています。昔もこの

た。 とが偲ばますが、暗闇の中、恐怖で人々は逃げ惑い、亡くなつた人は 400～500人ほどであつたといわれています。からうじて逃げおおせた人々も、嵐が静まつてから皿山に戻つてみると、そこは一面の焦土と化していましたといわれます。その後の復興のさなか、人々は登り窯の焼成室を仮住まいとし、それは『皿山代官旧記覚書』によれば「釜住居」と記され、その後、巡つてきた冬の季節の寒さや飢えを凌ぎましたが、同覚書には「有田皿山焼失ニ付、数千人之釜焼細工人共職方相続難相成」とあり、まさに有田皿山存亡の危機でし

この非常時に岩谷川内の正司家は米や着物など約300両の救援物資を皿山の人々に差し出しています。当時の皿山の人々の努力もさることながら、佐賀本藩や紀州・筑前の陶器商人たちにも援助を願い出て再興を果たし、400年余の歴史が途絶えることなく現在に続いている焼き物の町・有田ですが、今年も大きな災害がないことを願っています。

※有田町歴史民俗資料館ブログ「泉山日録」平成29年9月12日付 参照

秋が深まり始めた  
井手 邦男

# 急に本気を出した紅葉と 二人で歩いた秋



紅葉の下を歩きながら、妹は「来てよかつた」と言い、娘は夢中で写真を撮っていた。その後ろをゆっくり歩きながら、私は昔の家族旅行を思い出していた。若い頃はやりたいことが多く、景色をゆっくり見る余裕はほとんどなかつたが、今はこういう“ゆっくり歩く時間”がいちばん落ち着く。参道には多くの人が訪れていたが、皆静かに紅葉を楽しんでおり、境内全体が落ち着いた雰囲気に包まっていた。石畳を踏む控えめな音や、風に揺れる木々の音が耳に心地よく、季節の移ろいを素直に

帰り際、妹が「またよろしくね」と言つた。娘とはまた別の場所へ行くだろうが、妹を含めた三人の時間は、そう多くはない。家族の形が少しづつ変わつていく中で、今日過ごした静かな時間は、これからもふと思いつ出すだろう。大興善寺の紅葉は派手すぎず、どこか落ち着きがあつて、今の自分にしつくりくる。次の秋も、またこの三人で訪れられたらいいなと思いながら、寺をあとにした。

頃、娘と妹の三人で佐賀県基町の大興善寺を訪れた。娘とは普段からよく出かけるのだが、妹を連れての外出は久しぶりである。私には姉と二人の妹がいたが、姉と次女はすでに天へ旅立つた。今、兄妹として昔話を共にできるのは一番下の妹だけになり、その存在を以前よりも大切に思うようになってきた。その妹は、つい先日まで息子の玉ねぎ収穫を手伝っていたらしく、「気分転換したいし、たまには夫と離れんと気が休

大興善寺へ向かう途中、道沿いの木々はまだ色づきが浅く、「これは少し早かつたかもしけん」と思うほどだつた。娘も「まだ青いね」と言うので、内心少し気がかりだつた。しかし、長い階段を腰をかばいながら上りきり、門をくぐつた瞬間、景色は一変した。境内は赤、黄色、オレンジに染まり、見事な紅葉が一面に広がつていた。妹が「ここだけ急に本気出しどるね」とぽつりと言いい、三人で思わず笑つた。

感じられるひとときだった。一回りしたあと、休憩処で抹茶をいただいた。赤い毛氈が敷き詰められた空間で、紅葉の木々を眺めながら飲む抹茶は、どこか柔らかい味がした。添えられた小さなお饅頭は柿の葉の上に乗せて出され、素朴な見た目がなんとも良かつた。三人で並んで座り、特に会話がなくとも、その静けさが





## 江戸と有田の暮らしを考察する

鶴一樹

徳川家康公が江戸に幕府をひらいて戦のない世となつた。日ノ本の農民、武士、商人はのびのびと全力を出し、暮らしを良くしようと頑張つた。まずは米作り。新田開発、水利、灌漑、肥料など工夫して増産が成功した。そして北前船などで全国の物

仕事が沢山ある江戸に人口が爆発的に集中した。慶長五年(1600)、日本的人口は1200万人ほど、それが約100年後の享保六年(1721)には3200万人となつた。その後は、災害、地震、天候不順などで人口は3000万人のまま明治を迎えた。

そんな江戸の庶民の暮らしを再現すると、野菜売りの熊五郎さん朝の4時頃裏長屋で目を醒ます。七百文ばかり懐の巾着に入れて、やつちやば(青果市場)行つて、蕪、大根、蓮根、芋などを仕入れ、天秤棒を担いで町中を売り歩く。日暮れには上手く売り切つて仕事を終える。売り上げ千三百文ぐらい。仕入れを差し引き六百文稼いだことになる。天気が良い日はいいが、雨の日風の日バツタリ! 売れない日もある。

しかし今日はたんまり錢があるので酒を飲みに行くことにした。酒は一合二十文、五合ばかり飲むかもしれない。そば一杯一六文、にぎり寿司一個八文、天ぷら一個四文、ダンゴ一串四文、百五十~百六十文で済む。物の値段が安い。一文は今のが

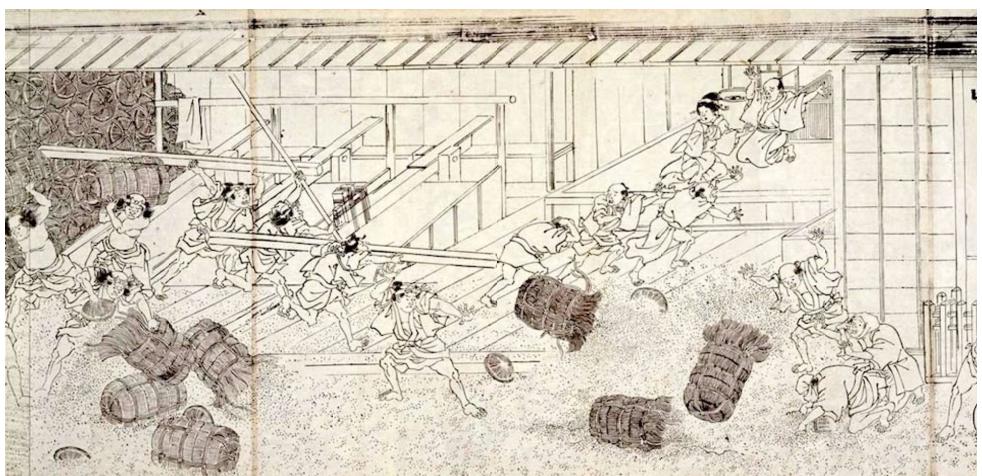
なら20~50円。一両は千文(一両は五~八万円)。残つた四百文は火事が物凄く多く、「江戸の華」と言われた。大工や左官職人は大忙し。仕事が沢山ある江戸に人口が爆発的に集中した。慶長五年(1600)、日本的人口は1200万人ほど、それが約100年後の享保六年(1721)には3200万人となつた。その後は、災害、地震、天候不順などで人口は3000万人のまま明治を迎えた。

当時、天候不順で冷夏、旱魃(かんばつ)で米の大不作。摂れない時、これを利用して悪徳商人や米問屋などが米を買ひ占めて、市場に米を出さず高値を待つて大きな利益を得ようとした。

江戸で、天明三年(1783)「天明の打ちこわし」が起つた。生活に困窮した下層の民衆が、米問屋、富裕の商人、高利貸を標的に襲撃する。こん棒などで建物を打ち壊し、家財や米などを略奪し暴れまわつた。この騒ぎは翌年まで収まらなかつた。こんな打ち壊しが大阪、石巻、小田原、宇和島など日本中で同時に起つてている。そして長崎でも高値の米に怒つた民衆が買い占めた米問屋十四軒を襲撃し打ち壊した。長崎奉行が出馬してやつと収まつた。

打ち壊しは有田でも起つた。天明七年(1781)七月一七日夜十一時、数十人の町民が大樽の米屋甚兵衛と米屋喜エ門の家に押し掛け襲撃した。大石を投げ込み家財など壊し米を持ち出した。そして、上幸平の米屋惣右エ門の家に向かつていたところ、皿山代官の下役郡目附島田丈七と役

者中溝常右エ門が駆け付けたので群衆は逃げ去つた。その場で逮捕された二人の自白によつて、一五名が佐賀の評定所に送られた。もともとと言えば、米一升が百八十文にも値上がりし、佐賀藩の定めたのは米一升四十文なのに四倍半にも値上がりしたのだ。有田皿山は焼き物作りだけで収入を得、運上金を搾り取られた。



江戸時代の「打ちこわし」『江戸市中騒動図』

有田皿山を支えるにやあさん（荷物を運ぶ人夫）は、少ない給金で武雄、伊万里、西有田から売りに来る米、野菜、みそ、しようゆなど全てを買うほかない。にやあさんは有田から伊万里まで一七キロの道のりを、焼き物を詰めた重量六十キロの荷物を運ぶ。多い時は一日に五十人六十人が行き来していた。日銭は三十銭！ 仕事のきつさを考えば恐ろしく安い。が生活していた。

そんな中に明治の頃、有田の伝説の人で、大物づくり給金はケタ違い。の男。井手金作がいた。ロクロの名なんせ金がたまると武雄や佐世保の色街に向いて、紋付・シルクハットのいでたちで現われ、店に入り浸りになり懐が空っぽになるとご帰還だが、その時は芸者二・三人と人力車を連ねて帰つてくるという豪快なカネの使いっぷりに「華の金作」「ハデの金作」と言われた。こういう気質は「宵越しの金は持たねえ」（金に執着するのを野暮といつて嫌つた氣質）といった江戸っ子の「粹」に通じていて、有田の町人にもちやんと粹な人がいたと、心強い気持ちにさせられた。

【参考】「有田皿山の制度と生活」  
宮田幸太郎著



国宝 彦根城

去年12月6日より9日まで3泊4日の旅行の日程で、肥前観光のバス（伊万里市東山代町の出雲さんの案内）で琵琶湖一周の旅に夫婦で参加しました。

伊万里を出発し門司まで移動する

と、新門司の名門大洋フェリーターミナルから大阪南港まで船中泊をしながら移動しました。

大阪南港に着くと国宝の彦根城をはじめ幾つかの史跡を見て回りました。彦根城の階段は垂直に近く、手すりを一生懸命つかんで登りました。天守閣からは彦根の町が一望され、自分が城主になつて彦根の町を取り仕切つているような気持ちになりました。彦根の町は、桜田門外の変で暗殺された井伊直弼の生誕の地です。彦根の城下町はそういう大人の出る雰囲気漂う町だと感じました。

琵琶湖については、琵琶湖商法とか日本で最初に水力発電所が出来たところと聞いていました。琵琶湖を見るのは初めてでしたが、すごく大きくて物静かで堂々としているようを感じました。水際にきれいな松ぼっくりがあつたので2、3個持ち帰り自家の玄関に飾つておりましたが、いつの間にか消えておりました。人間に置き換えると拉致にあたります

## 琵琶湖一周の旅

坂井 勝也



彦根城天守閣からの展望



日本最大の湖 琵琶湖の全景



が、松ぼっくりは自分の最後を過ごすところではないと夜中に脱走して、今頃は熊本あたりに一休みしているのではと思っています。

今度の旅は大病の後のことでもあります、今回が最後の旅になるかもわからぬと思っていたので、見るものみんな輝いて見えました。

## 有田の西国三十三所

前田順三

### 解体前の平野観音堂（本町）



有田町の泉山から現在の伊万里市二里町まで「有田光明新四国」という遍路道があるが、「西国三十三所」の写し靈場もあったようである。その名残りが本町の平野觀音堂といふところにあつた。毎年八月十七日に「平野觀音さんの祇園」として小規模ながらも執り行われていたが、その觀音堂が老朽化で、屋根が落ち込み、堂内の仏壇のところに泥が落ちるなどしてきた。年に一度、祇園の前に掃除をすることで何年も凌いできたが、いよいよ危険であることか

### 観音堂に掲げてあった御詠歌

なぜ西国三十三所の札所であることがわかつたかと言えば、解体前の堂内に十一番札所の御詠歌「第十一番 準提觀世音（准胝觀世音）<sup>（ぎやく）</sup>くゑんも もらさですくふ ぐわんなれば じゆんていだうは たのもしきかな（逆縁ももらさで救う願なれば 准胝堂はたのもしきかな）」<sup>（カ）</sup>という額があり、最初、四国八十八カ所十一番札所の御詠歌かと思つていて、調べたらそれとは違ひ西国三十三所の十一番札所の御詠歌であつた。そこで、有田（いつ頃か、まだどの程度の範囲なのか全くわからないが）には四国八十八ヶ所だけではなく、西国三十三所の札所もあつたのかと思つた。そこで他にも有田に西国三十三所の札所もないかと探したが見つけることはできなかつた。

私は、四国八十八ヶ所の写し靈場については、有田の他に、山内、武雄、伊万里、山代、塩田などの新四国八十八ヶ所の札所を探して回ったが、それぞれ六十ヶ所ほどしか見つけることができなかつたが、その中に山内に観音靈場の札所と思われるところもあつた。十一番、十六番、二十一番（十一番と二十一番は同じ場所）であり、十六番札所は目立つ場所

ちなみに、四国霊場は一八十八ヶ所（か・カ・箇）であるが、観音霊場は、「三十三所」といい、「ケ・カ・箇」はつけない。また、十八の四国霊場を巡るのを「遍路」といい、三十三の観音霊場を巡るのを「巡礼」（「順礼」ともいう）といふ。

三十二」という数字は、「法華經」『觀世音菩薩普門品第二十五』（「觀音經」）に、觀音が相手に応じて三十二

いるところもあるが、それ以外に鶴音堂だけで地元の人々にお祀りされているところも多い。

場があつたと思われ  
た。 た。 た。 た。  
ナ町町のおま  
に行つたら観音靈場の一一番札所があつ

にもあり清掃もよく行き届いていて、近隣の地区の方の日頃のお世話のほどが感じられる。



平野觀音堂内にあった觀音菩薩と地藏菩薩

三の姿に身を変え(三十三應化身(おうげしん))、教えを説いて衆生を救うとされている。この信仰から三十三觀音や三十三所靈場が成立した。

外尾町の椎谷神社の本殿手前に池があるが、その池の左側に觀音堂があり、その裏の岩面に三十三体の石造の觀音仏がある。それら三十三觀音がいつ造られたのかと思つていたところ、三十三觀音仏の一つに寛政九年(一七九七)と彫つてあるものが、三十三体とも概ね同時期に造られたと推測する。また三十三觀音の前にある地藏菩薩の石造物があるが、その台座には明和七庚寅(一七七〇)と刻まれている。

三十三觀音というのは、先ほども書いたが、「法華經」の説く觀音菩薩三十三身に基づき、その後の中国における故事などに基づいて考えられたのが、楊柳・蓮・臥・持經・圓光遊戯・德王・水月・蓮・白衣・衆・持經・圓光・阿彌陀・阿彌提・普悲・持蓮・灑水の三十三種の觀音である。

椎谷神社の石造の三十三觀音は一

体が四十五~四十六cmほどで、一体々々違う容姿で彫られている。前記の三十三觀音のそれぞれの外見の特徴、御利益などを調べてみて当てはめてみた。特徴が顯著なものもあつたがそれは稀で、ほとんどの觀音仏は曖昧で、概ねの外觀で当てはめてみた。

その御利益、御利生は多岐に亘り、確かにどれかの觀音仏がどのような時でも救つてくれそうである。

現世利益の身勝手な発想はおいておくにしても、よくぞこれだけの觀音仏を彫つたものと、発起した当時の人のその篤い信仰心には敬服した。岩面に穴を深くあるいは浅く掘つたり、坐しやすいように台座を置くところを平たくするなどして、それぞれに手を入れてあることがわかる。また祈願者の名前が彫つてあるのもいくつかあり、久富、松村、川原、前田という名字が読める。

「お客様さんは、どんなのが好いとんさアう?」と、突然声がかかりました。私はすかさず、「染付が好きです。」と答えました。すると、その一言で、店主の様子が一変しました。「うん、そうね。」と、ニコッとなり、雰囲気も、改善しました。

私は外尾町生まれで、椎谷神社を地元の神社として親しんできたので、神社とはこのようなものと当たり前のように思つていたが、いろいろと各地の神社を廻るにつれて、椎谷神社がいかに良き神社であるか、そしていろいろなものを見過ごしてきたか、最近特に認識させられているところである。

## 古伊万里にみる「染付の美」

山口 信行

古伊万里に興味を持ち始めた頃、もう三十年位前にもなりますでしょ

うか、ある佐賀市にある古美術店に初めて入りました。今ならそうでもないかと思われますが、あの頃は、やはりというか、まあ、こちらも少々緊張してはいたとは思うんですが、いちげんさんに対してもとなく態度が無愛想。店主の方に何となく、うさんくさそうに見つめられてる気配を背に感じながら、私は商品を見てまわっていました。

「染付」という言葉の由来は、はつきりとはしていないようです。もの

の本によれば、白地に青一色でモチーフが描かれた器は、藍染めの着物を思わせることからそう呼ばれているとも云われています。染色用語から、というわけです。「染付」と呼ぶにはどうやら二つの条件を満たすことが必要のようです。一つは、素地が白磁(磁器)であること。さらに、高火度で焼成される透明釉の下に文様が描かれていること。この双方を満たしている、ブルー&ホワイトのやきものというわけです。中国では青花(青華)と呼んでいるようです。例えば、イスラムやヨーロッパの陶器の場合には、白釉藍彩と呼んで染付と区別しているといいます。

店主が問うたのは、多分どんな品が欲しいかであつたのでしようが、私が古伊万里の種類で応じたので、この客はズブの素人ではないナと考えられたのではなかつたからではと、

ところで、染付の青の色料は、酸化コバルトを主成分とする絵の具で、一般的に呉須と呼ばれ、それに、透明の釉薬によって発色が初めて鮮明に

そのとき思つたのでした。前もつて古伊万里の本を読んでよかつたと思ひながらも、この世界での「染付」という言葉のもつ重みをあらためて自覺しました。そして、生まれて初めての、染付の、ちつちやな蛸唐草の徳利をそこで求めたのでした。



なるというわけです。その呉須は、近年では人工的に合成しますが、もともとは天然に産出する鉱物であり、江戸期においては中国から輸入されていました。

以下にあげています対の画像は、江戸時代始めの初期伊万里と呼ばれていますが、同じ呉須でも染付の色

調に違いがあるようです。これは、酸化コバルトのほかに、マンガン、鉄、クロム、ニッケル、銅等を含み、これらの微量の金属が染付に色調の違いを生み出しているとも云われています。もちろんそれだけではなく、呉須はそれ自体では鮮やかな藍色とはならないので、透明の釉薬によつて発色が初めて鮮明になると云われますので、それらが複雑に絡みながらそれぞれの色調を生み出しているのかもしれません。もちろん、産出地区の陶石の違い、焼成の条件等で、色合いが異なることもあり得ると思われます。一般に、酸化コバルトの比率が高いと紫色の強い色調、酸化マンガンが多いとやや灰色があり、酸化第一鉄が加わると褐色がかた藍色になると云われているようです。

更には、焼成の違いでは、還元炎焼成では発色も良いのですが、酸化炎焼成では焼成が甘くなり、ムラが出たり褐色がかつた傾向があるようです。有田磁器の染付には、いすの木の灰を用いるのが最良とされ、淡青色の微妙な色調が染付の色を引き立てています。

古伊万里では、「赤絵」の魅力はもちろんですが、それ以降でも、や

や青みがかつた地肌の色調に、落ち着いた静かな藍色の魅力が映える「染付」に多くのファンがいるのもよく分かります。まさにその両輪あつての、江戸期の有田焼、古伊万里の魅力と云えるのではないかと思いま

更には、焼成の違いでは、還元炎焼成では発色も良いのですが、酸化炎焼成では焼成が甘くなり、ムラが出たり褐色がかつた傾向があるようです。有田磁器の染付には、いすの木の灰を用いるのが最良とされ、淡青色の微妙な色調が染付の色を引き立てています。

さて、私事ですが、お古のPCが使えなくなつて、再び、いっぽん指

↑ エッセーが復活しましたので、今度こそ、手短になります。〆切も間近なのでどうしようか焦つております。PCの件では、ハブニングではありましたが、今年は、なんなくですが、幸先良さそく予感がします。

待ちに待つた、番組の始まりは、眩しい太陽がキラキラと海を照らし、海士(あま)が釣った新鮮な魚を手早く料理する、おしゃれなイタリアン・レストランからでした。

更には、焼成の違いでは、還元炎焼成では発色も良いのですが、酸化炎焼成では焼成が甘くなり、ムラが出たり褐色がかつた傾向があるようです。有田磁器の染付には、いすの木の灰を用いるのが最良とされ、淡青色の微妙な色調が染付の色を引き立てています。

古伊万里では、「赤絵」の魅力はもちろんですが、それ以降でも、や

や青みがかつた地肌の色調に、落ち着いた静かな藍色の魅力が映える「染付」に多くのファンがいるのもよく分かります。まさにその両輪あつての、江戸期の有田焼、古伊万里の魅力と云えるのではないかと思いま

## 岸岳城主、波多親(ちかし)

鶴 美百合



待ちに待つた、番組の始まりは、眩しい太陽がキラキラと海を照らし、海士(あま)が釣った新鮮な魚を手早く料理する、おしゃれなイタリアン・レストランからでした。

その美味しそうな豪華な鮑、いく



法安寺にある波多親の石像

皿、えつ？ここはイタリアのシチリア半島？といつても過言ではなく、小さな教会も見えています。ここは、唐津玄界灘にある小島で「松島」というパライソ（楽園）のようなところでした。そして、島中の人達がキリシタンだそうです。その中には、ローマまで行つた信徒さんがお祈りするシーンがあり、私のハート❤️は「ハレルヨヤ！」でした。

後半は、もう、圧巻で「法安寺」（唐津北波多）にスポットが当てられました。待つてました！

「法安寺」とは、驚くことなけれ！私の母の大叔母さんが大正時代に始めたお寺です。

カメラの映像では、法安寺の玄関左側にある、わあ、え～つ、「あつ！」と驚く為五郎！的な巨大な（高さ10m程？）の波多親の石像がデーンと映し出されていました。そしてカメラは波多親のお顔の方へZoom in !!

そこで、番組では、岸岳城の麓にある「法安寺」が菩提寺を持たない波多親一族と家臣の冥福を祈つて、一つのお寺として紹介されたので

さて、波多親と言えば、海外貿易で名を馳せた上に、松浦党にルーツをおく超！エリートであります。いつも言うまでもなく、日本最古の「割りだけ式登り窯」の古窯群がある事は、史談会の方だつたら、全員ご存知ですね。ハイ。

いつ始まつたのかは諸説あります  
が、この古窯群は慶長3年（1598年）以降に開窯された唐津系陶器窯より古く高麗末期の窯業技術の特徴があるという、野田敏夫先生説ではないだろうかと私は思つています。

このように、有田焼きの源流とも言われる唐津焼、最先端の海外の技術を取り入れ上松浦をリードした藩主ですが、波多親には、なんと！菩提寺がありません。

「ええつ！なして？」ですよね。波多親は何かをしでかしたのでしょうか？いいえ、なーんも、悪か事はしとらつさんと私は思うのです。

そんな、これでは、一方的すぎる  
ではありませんか！波多親には訳があつたのです。が、しかし同年旧領地は秀吉のお友達の寺沢志摩の領地となつてしまつたのです。もうつ！

病気であると偽つて熊川から先に進

吉の命令で、「改易！」となり、所領没収！それからは、あれよあれよと常陸国築波佐竹義宣の預かりとなつてしまつて、その後、どこかで亡くなつたと伝えられているという、なんとも「敗者」というイメージで語ら

海上から岸岳城がある野山を仰ぎ観ていた帰陣途中に、突然、豊臣秀吉の命令で、「改易！」となり、所領没収！それからは、あれよあれよと常陸国築波佐竹義宣の預かりとなつてしまつて、その後、どこかで亡くなつたと伝えられているという、なんとも「敗者」というイメージで語ら

どうすればいいのでしょうか？

しかし、日本史を編纂した宣教師ルイス・フロイスは知っています。



名護屋城址から望む玄界灘

すると、どうでしよう、後光がさしたような穏やかなお顔の波多親がやつと現れたように感じたのでした。

さて、それはそうと、先ほどの波多親に菩提寺がないとはどうも気になりますね？では、タイム・マシンで、文禄の役（1592年）に戻つてみてみましょう。

した。番組では、法安寺に祀つてある波多親の奥方で美人で有名な「秀の前」と「親」のツーショットも写しだされましたよ。

真言宗善通寺派に属し、波多三河守を大日如来にたどり本尊とする大正十二年（一九二三）二月、小野妙安師によって開山されたもので、御利益、功德のあらたかな寺として県内はもちろん遠く県外からの参詣者も極めて多い。

由緒ある波多氏は没落以来、善提寺すらない有様で、岩鼻末孫といわれる輪塔は各地に散在し、無念の最後をとげた多くの家の靈廟は寄る所もなく、さまよい成仏を求めている。

法安寺の由来が書かれている

さて、なんだかんだとまたまた長くなつてしまいそうですが、最後にもう一つ言わせてください。（手短に）

あら、意外！とは思われませんでしょ  
うか？ご存知だつたでしようか？

波多親が有馬藩からの養子とは、  
す。  
ね！）

有田盛も有馬藩からの養子で、大  
村純忠と兄弟です。よつて、大村純  
忠はお兄さんになります。ひやあ  
有馬ファミリー凄すぎでしょ。

そして、千利休と言えば「ねのこ餅」という筒形の奥高麗茶碗を持つて、『波多親と千利休 & 津田宗久』との茶人との接点があつた事がわからり、とても嬉しく思いました。親さんのパーソナリティを少しですが垣間見たような気がして波多親さんの大、大、ファンとなりました。

よかつた、よかつた、この放映された「唐津玄界灘に抱かれて」の番組を母に見せたかったあります。いえ、母の大叔母さんこそ、観て欲しかつたと思います。



### 糸の前と波多親を祀つてある墓石

まなかつた。彼はこのために三人の武将から告訴され、彼らは高麗から、この件を閑白に報告した。波多に与えた俸禄領地を没収するために、なんらかの口実を見出し、小細工を弄しようと企てていた閑白は、この訴えを小耳にして満悦し、直ちに彼を追放处分に付した」と。

しかも、有馬藩、日野江城主と言えば、またしてもキリシタン大名で海外貿易にたけ、しかも、有馬にセミナリヨを建設した、キリシタンに優しい有馬晴信ではあーりませんか！聖画を描かせるためにイタリアから宣教師で絵画の先生、ジヨバンニ・ニコラウを呼び寄せたあの有馬晴信は、おお、なんと！波多親の弟だつたとは！！

た領主ですが、なんと！イエズス会に「飯盛」という地を寄進したいと申し出たと言うのです！このように、「キリスト研究」誌に記載があり、色々な視点から見る日本の歴史、キリスト教歴史研究はとても面白いですよ。

さあ今度こそ、最後に、もう一  
だけ、言わせてください。波多親は  
唐津焼を推奨し擁護した焼き物好き  
だと推測いたします。

さあ今度こそ、最後に、もう一つ  
だけ、言わせてください。波多親は

実は、1588年に波多親は上洛し、千利休と津田宗及の茶席に招かれて、お茶に自信が持てたと記されています。すごい！



昭和30年頃?自宅前 「おくんち」 だろうか

私は終戦から四年半経った頃の昭和二十五年一月に上幸平で産声を上げた。

中村 貞光

## 七十年前を回顧する

記憶を辿ると、その頃の我が家は小さな食料品店で、店の入口付近には一斗缶が幾つか並んでいたことをおぼろげながら覚えている。その一斗缶には食用油が入っていて、柄のついた杓で量り売りをしていた。古い家族のアルバムに、三ヶ月頃だろくか幼い頃の写真見つけた。店の中で頭を搔きながら恥ずかしそうに坊ちゃん刈りの私が一斗缶の並んだ店の入口で写っていた。その頃の私は油屋の坊ちゃんと呼ばれていた。

家の奥二階にある倉庫には、ガラス製のランプが倉庫の半分ほどにぎり並んでいた。ランプ用の燃料になる油も扱っていたことが分かる。家庭に電気が入る以前の生活にはランプは欠かせない必需品だった。祖父は油を売つて生計を立てていたが、電気が家庭に入り徐々にランプ用の油は不要になつていく。七輪も店頭に並んでいた記憶がありもちろん販売をしていた。

昭和の時代は車社会になりガソリンが普及していくわけだが、祖父は油の商売から手を引き、焼き物の行商を始めたようだ。行商で立ち寄つた広島で後の後妻となる祖母と娘は中田に連れてきた。中村家の長男が戦死し、祖母の連れ子である娘は中

村の跡取りとなつた。祖母は戦時中仕事を持たない弟家族を有田に呼び寄せ食料品を扱う我が家の店を任せた。私が生まれる前年に祖父が亡くなり、我が家は一時期祖母を筆頭に、叔父、従姉（伯父の長女）、私の両親、二人の兄、姉、私、そして祖母の弟家族四人が住む十三人の大所帯になつていた。

自分のことはこれくらいにして、当時の有田の風景は暮らしあはうだつたのか幼い時の記憶を頼りに書いてみたい。

私の自宅前には岩尾対山窯の工場があつた。家の隣は絵描きの工房があつて、その隣には魚屋があつた。路地を挟んでその隣が松本家であつた。魚屋の前にはふくろやという衣類や小間物を扱う店があつた。我家の上隣は有品堂という焼き物屋でその二軒隣は岸川肉屋があつたが、その隣に大関という食堂も兼ねていた。我が家周辺には食料品を扱う小売店が我が家を含めて3軒、肉屋は2軒のほか焼き芋を焼く店もあり日頃の生活用品は近くで充分に貰える環境があつた。

魚屋の記憶を辿ると、店の入り口にあるトロ箱にはハエがいっぱい飛んでいた。中村家の娘は中

村家の次男だつた父と所帯を持ち中村の跡取りとなつた。祖母は戦時中仕事を持たない弟家族を有田に呼び寄せ食料品を扱う我が家の店を任せた。私が生まれる前年に祖父が亡くなり、我が家は一時期祖母を筆頭に、叔父、従姉（伯父の長女）、私の両親、二人の兄、姉、私、そして祖母の弟家族四人が住む十三人の大所帯になつていた。

自分のことはこれくらいにして、当時の有田の風景は暮らしあはうだつたのか幼い時の記憶を頼りに書いてみたい。

私の自宅前には岩尾対山窯の工場があつた。家の隣は絵描きの工房があつて、その隣には魚屋があつた。路地を挟んでその隣が松本家であつた。魚屋の前にはふくろやという衣類や小間物を扱う店があつた。我が家周辺には食料品を扱う小売店が我が家を含めて3軒、肉屋は2軒のほか焼き芋を焼く店もあり日頃の生活用品は近くで充分に貰える環境があつた。

魚屋の記憶を辿ると、店の入り口にあるトロ箱にはハエがいっぱい飛んでいた。中村家の娘は中

地面にたたきつけて「ハエ取り名人」と得意げになつていて。正月近くになると、クジラの小腸を店の前で湯がいていた。百尋（ひやくひろ）と言つた。正月の料理には必ず出てきたので食べた記憶が鮮明に残つてゐる。茹でられている時の匂いが独特で、臭くてたまらなかつたが食べるとこれが美味しかつた。



クジラの小腸 百尋（ひやくひろ）

目前の岩尾の工場からは、お昼になると職工さんたちがお弁当のおかずに総菜を買いにきていた。我が家

家では野菜の天ぷらを良く揚げていた。サツマイモの天ぷらは今でも当時の記憶が蘇り家内に良くりクエストする。

また、近くには煙草と本や文房具など売っている嬉野書店があつた。叔父に金ちゃんの店と呼んでいた。煙草を買ってきくれと頼まれ良く通つた。その隣には貸本屋があり漫画本を良く借りていた。店の人の目を盗んでは大人の本をドキドキしながら立ち読みした。少々マセていたのだろう。



荷馬車はこの絵より多くの荷を積んでいたので隠れて乗れた

我が家のすぐ隣が柿の木小路と言つた。当時は舗装されておらず、ビニールや釘ヌキ遊びと言つて5寸釘で相手の釘を倒す遊びなのだが、釘を土に刺すにはほど良い固さで遊ぶには持つてこいの場所だつた。松本家は隣に有田物産という焼き物の会社を持つていて、表通りから路地を入り奥にある建物では、藁で焼き物を造りする荷師さんの器用な荷造り作業を今でも思い出す。また小路庵（江副家）の隣には藁を保管する大

農家の人々が各家庭の汲み取りに来ていたようだ。代金を今は業者に払うが昔は逆だつたらしい。もちろん水洗のトイレが普及している現在でも有田はまだまだ遅れていて、昔のポツントトイレが現存している。

農家の人が各家庭の汲み取りに来ていた。代金を今は業者に払うが昔は逆だつたらしい。もちろん水洗のトイレが普及している現在でも有田はまだまだ遅れていて、昔のポツントトイレが現存している。

小学校に通つていたころは、荷馬車も良く通つていた。藁で荷なつた焼き物を積んだ荷馬車は表通りで良く見かけた。「カツボカツボ」と馬の歩く音が響いた。学校帰りには荷馬車の後ろにつかまりぶら下がつて帰宅したことが良くあつた。

その頃は便所の汲み取りも荷馬車で來ていた。家の入口から便所までの通路に新聞紙を敷き詰め、桶を肩にかけて何度も往復しながら家の中を通るので臭くてたまらなかつた。ずっと後になつて分かつたのだが、

裏には小川が流れ三空庵広場があり、大きなイチョウの木と隣に地蔵堂があつた。今は地蔵堂は当時と場所が変わつていて、地蔵堂の横には久部さんという馬を飼つてゐる家があつた。50mほど先の川沿いに馬が飼われていた。馬小屋の横から山に登ると10分ほどで黒岩に着いた。

黒岩に上ると町中が良く見渡せ、使い古しのノートを持って山に登り紙飛行機を作り飛ばした。当時の裏山では縄などを持つて行つては小屋づくりもして遊んだ。ロープを何本かの木に張つて小枝を張り巡らすと小さな小屋が出来た。持つてきましたおにぎりやお菓子を食べた。

また、秋には裏山でマツタケを探して取つてゐるところを地主に見つ

た。そんな時代でも、寒い冬の時期などは、学校から帰ると父の仕事部屋は煎餅を焼くので暖かく、しかも煎餅の切れ端が出るので、甘いお菓子など買えない時代でも、その切れ端の煎餅が何よりのおやつでもあつた。

当時はその切れ端を「ミミ」と呼んでいた。私の同級生は時折私についてきて柿の木小路で待つていて、私は急いで自宅に戻り煎餅の切れ端を菓子箱の上蓋に入れて友達と一緒にぎりやお菓子を食べた。

三空庵広場には上幸平地区と大樽地区の墓があり、その双方に分かれゴム銃にパチンコ玉くらいの投げ玉の花火（癪癪玉）を挟んで撃ち合う遊びもあつたが、今思い出すとかなり危険な遊びをしていたものだ。

また我が家は話に戻るが、私の父は商売には向かず、我家の店は祖母の弟夫婦に任せられ、父は一時期自宅の奥の部屋で煎餅を焼いていた。大村あたりまで自転車の乗せて行商に奔走した時期があつた。母の話では売れずに持ち帰つてきたこともあつたという。

かり逃げたことがあつたが、それ以来マツタケ取りは一切やつてない。



柿の木小路の裏山「黒岩」



昭和時代の白黒テレビ

周囲に目を向けると、電話などはまだ置いてなくテレビもまだ高級品で各家庭にはない時代だ。我が家は小さなトランジスタラジオしかなかった。隣は焼き物商売をしていて子供たち。昭和時代の白黒テレビ

年も時代でもあり、高級なお菓子や食べ物は不足しており、特に甘いものなどは贅沢品だった。食べられるだけでも良い時代でもあった。

煎餅の材料に卵の白身を使い、残った黄身は自家製のマヨネーズに変身した。黄身の中に熱した油を少量づつたらして入れながら良く攪拌して作るのだが、幼い頃はマヨネーズ作りを手伝い得意満面だった。

有田小学校も当時は木造校舎で、生徒数は1400名を超えていた。小学校4年生になると新築工事が始まつた。5年生から新校舎である。担任の先生が宿直の時などは、先生から「泊まりにいくぞ！」と声が掛かり、友達と良く泊まりに行つた。

8月の祇園さんの時期は、小川には大きな武者などの行灯が造られて飾られて、テキやの店も幾つも並び賑わつた。八坂神社の川飾りの鮮やかな色彩を思い出す。娯楽の少ない時代で夏まつりは大賑わいした。大きな白い幕を張り、映画も上映された。

子供の頃の記憶は70年以上たつた今も、未だ色褪せず鮮明に蘇る。

実は、10年以上前から、過去を振り返りながら「自分史」軌跡を書いてきたので、一部を切り出してさらに記憶を辿りながら文章にしました。皆様にも自分史の執筆をお勧めです。

8月の祇園さんの時期は、小川には大きな武者などの行灯が造られて飾られて、テキやの店も幾つも並び賑わつた。八坂神社の川飾りの鮮やかな色彩を思い出す。娯楽の少ない時代で夏まつりは大賑わいした。大きな白い幕を張り、映画も上映された。

夜になると先生と一緒に暗い校舎を恐る恐る見て回つた。勿論、勉強などはそつちのけで遊んでいた。遠くで夜泣きそば（屋台のラーメン）のチャルメラの音色が聞こえると、ラーメンが食べたいと先生に強請つたこともあつた。明星ラーメン「チャルメラ」のイラストは、そんな昔の思い出を懐かしく思い出させてくれる。



今回の会報も無事に編集を終えることが出来ました。まずは皆様に御礼申し上げます。昨年秋に大串和夫さんが亡くなり2カ月以上が経ちました。突然の訃報に心が折れそうでしたが、鶴一樹さんと山口信行さんが新たな史談会のまとめ役として協力頂けることになり、ひとまず安心です。これからも会員の高齢化と減少に歯止めがかからず、何かと気が落ち着かない日々が続きますが、会員の協力を頂きながら無理のない範囲で楽しい運営が出来るよう事務局の仕事を続けたいと思つています。

今後とも皆様よろしくお願い致します。



## あとがき